お姫様のガーディアン

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お姫様のガーディアン

【Ｎコード】
Ｎ１５１５Ｚ

【作者名】
河野　る宇

【あらすじ】
＊とある小さな国のとある王族――「外交デビューだ！」と、后と王は一人娘を大使として国外に送る事にした。
「これもダメ！」お后は、豪華なテーブルの上に並べられた写真に向かってダメだしの最中だ。
※小説サイト「野いちご」にも掲載している作品です。

＊思案中

「ああ……この男もダメ」

ここはヨーロッパの中の小さな国――ルシエッティ王国。

世界地図にさえ、申し訳なさげにしか記されていないほどの小国だ。それでも王国は王国、統治しているのは紛れもなく王族である。

王に一人娘が産まれようが世界は何の感心も示さない。それくらいの小国であってもだ。

まもなく17歳になる王女は艶やかな栗色の髪を腰まで伸ばし、輝く碧い瞳は長いまつげがその魅力を高めていた。美しい小鳥のような声は両親の自慢だ。

さして感心もされない国だが「外交」という名の一人旅が、17歳の儀式のように昔から受け継がれていた。

さして感心もされない王族であるにもかかわらず、王女を守る人間をお后は厳正に選んでいる最中なのである。

「！　この男性は……？」

后は、メインで撮られている男の後ろにチラリと映っている人影に目を向けた。

「誰か！　誰かおらぬか」

「何かご用でございましょうか」

声を張り上げると、侍従の1人がしずしずと近寄って訪ねる。整えられた襟がまぶしい老齢の男性だ。

「ランカーを呼んでちょうだい」

「かしこまりました」

呆れた頼み

その青年、ベリル・レジデントはひと仕事を終えこれから休暇でもとろうかとオープンカフェのテーブルに世界地図を広げた。金髪のショートヘアに、エメラルドの瞳は印象的で外見は２５歳ほど。

アメリカ合衆国、フロリダ州――東南部に位置する州である。メキシコ湾と大西洋に挟まれるフロリダ半島の全域を占めており、北はジョージア州とアラバマ州に接している。

サンベルトと呼ばれる比較的気候が温暖な州の一つだ。

「！」

その青年が地図を眺めていると、目の前に黒いスーツを着た男が彼を見下ろした。栗毛で少し長めの後ろ髪をゴムで簡単に束ねている。

長身の男はサングラスを外し切れ長のブラウンの瞳で青年を見つめた。

「ベリル・レジデントだな？」

「何か用かね」

怪訝な表情を浮かべる青年に男は静かに発する。

「君に依頼したいことがある」

言って、すいと懐から何かを取り出した。

「？」

差し出された写真を見やると、どこかの王族らしいものだ。

「王女が外交のため国外に出る。そのガードを頼みたい」

「……」

青年は、眉をひそめて向かいのイスを促し腰掛ける男に口を開く。

「私は傭兵なのだが、理解してくれているのだろうな」

「もちろんだ」

ならば何故、警護など依頼してくる……青年はますます眉間にしわを刻んだ。

「お后は初めての王女の外交に粗相があってはならないとガードを厳選された」
「厳選するならガード専門の奴にしろ」
「もちろん、ガードにも目を通した」
「何故、私に……」
その問いかけに、男はしばらく考えるような仕草をしたあと、「正直、我が国は狙われる要素などほぼ０％だ」
「！」
「極小で地図にも載っているかどうかすら解らない。専門的な知識より……」
「見た目重視と言いたいのか」
頷いた男に頭を抱える。そんな彼に男は続けた。
「申し遅れたが、俺はランカー。王族付の『なんでも屋』だ」
そう言ってもう１枚、写真を差し出す。
「これはケインだ」
見せられた写真に応えた。しかし男は、目の前に映し出されたゴツイ男の後ろにちょろりと映っている人物に指を示す。
「……なるほど。そういえば２ヶ月ほど前に奴と仕事をした」
こんな写真から私を辿ってくるとは……
「この男を探し出し、映っている人物の居場所を訪ねた」
「そんな手もあったな」
呆れて目を据わらせ、コーヒーを傾ける。
「断る。と、言ったら？」
「受けてくれるまでつきまとう」
それは困る……
「報酬は弾む。受けてくれないだろうか」
ベリルは言われて、小さく溜息を吐き出す。
「私は“表”には顔を出さない主義でね」
「だったらサングラスでもすればいい」
さらりと青年の言葉を返した。

「処で」
男は付け加えるように問いかける。
「ずいぶんと面白いしゃべり方だな」
「親が厳格だった」
即答すると互いに見合い、沈黙がしばらく訪れた。
「王女付のガードも同行する」
「何人だ」
「側近として1人。あとは周りに数人」
「性別は」
「男だ。名前をアライアという、２０歳だ」
「！　若いな」
「君とそう変わらないだろう」
と、３０歳を過ぎた辺りのランカーがいぶかしげな表情を浮かべる。
「５つも違えば変わる」
「それで、受けてくれるのか？」
「……ふむ」
小さく唸り、王族の写真を見つめる。
「断れないのだろう？」
「受けてくれるまで依頼し続ける」
そこまで言われては受けるしかない。
「高いぞ」
溜息混じりに立ち上がった。
「承知している」

＊煌（きら）びやかに

ルシエッティ王国――王族が住まう城にベリルは訪れていた。いくら小国とはいえさすが王族だ、王宮の品はどれも豪華なものばかり。

大理石の回廊には高価な陶芸品と絵画が飾られ、侍女と青年の足音だけがゆっくりと響いていた。

「まずはお后様との謁見です」

侍女が一際（ひときわ）、豪華な扉の前で会釈して発した。普通なら王との謁見が先のように思われるが、彼を選んだのは王妃という事で「まず先に見ておきたい」との事だった。

なんとなく、スーパーで選ばれた魚のような感覚になる。

「まあ構わんが」

外見のみで選ばれたようだし……ほぞりと口の中でつぶやき、開かれた扉をくぐり抜けた。

高い天井に吊り下げられたシャンデリアが微かに透明の音を立て、2つある玉座の向かって右側に女性が上品に腰掛けて入ってきた青年を見つめている。

見栄えのするドレスに身を包んだ王妃だ。

「あなたがベリル？」

「はい」

青年にしてみれば、おおよそ似合いそうもない丁寧な言葉を発した。

「よく来てくれました。詳細はランカーに聞いて頂戴」

美しいブロンドをアップしダイヤの散りばめられた髪飾りが輝く。

王妃は青い瞳で青年をじっくり眺めると、納得したように数回頷いた。それは『合格』を意味しているのだろう、それだけ告げると部屋から出て行った。

「ベリル」

「ん？」
振り返るとランカーが親指を示し、「君の部屋に案内する」とあごで促した。

「……」
案内された部屋に青年は唖然とする。ホテルのスイートルームを越えた造りに何も言えない。
「私に、ここに泊まれというのか」
眉間にしわを寄せる。豪華な天蓋付（てんがいつき）のベッドに、美しい花々が咲き誇る庭園が見渡せるバルコニー。
「君は大切な客だ。失礼があってはならない」
「私は厩（うまや）でも失礼とは感じない」
王族の見栄もあるのだろうが、この待遇にはいささか呆れる。そして、侍女が持ってきた服に眉をひそめた。
「ああ……」
それに気付いた男は、その服を軽く持ち上げる。
「君の衣装だ」
「遠慮したい」
「君がそれでいいなら構わないが、周りとは雰囲気が……」
「違っても構わん。むしろそうしたい」
「今夜は宴だ。君にも出てもらう」
「！？　なんだと？」
上品な形（なり）をしているくせに何が嫌なのか……あからさまに嫌悪感を表情に見せつける青年に眉をひそめる。
むしろこの城にいても何ら違和感を感じない言動の青年だというのに、それと本人の居心地の良い場所とは異なるようだ。
「そういう訳だ」
ニヤリと笑い部屋から去っていく。
「……」
男の背中を見送ったあと、しばらくその衣装を呆然と眺めていた。

その夜――

「……」

青年は一応、与えられた衣装を着てみたものの姿見に映し出された自分の姿に頭を抱えた。白い軍服風の上着に金の房が付いた、いかにも高そうな装飾が施されている。

本当に行かなくてはならんのか……？

ノックの音が聞こえて、このまま逃げ出したい気分にかられた。

「！　やあ、似合うじゃないか」

「本気で言っているのなら殴るぞ」

迎えに来たランカーをギロリと睨み付ける。

「今日の宴で王女と王、アライアに顔見せなんだよ」

「出来れば別の機会にしてもらいたい」

「まだ怒ってるのか？」

「お前は嬉しそうだな」

「君はいつも飄々（ひょうひょう）としているからね。そんな顔を見られて楽しいよ」

「言ってくれる」

しばらく歩くと大きな扉が目に映る。

「……」

このまま引き返したいものだが……青年はそんな衝動を必死に抑えた。そうして、開かれた扉から見えた景色に一瞬クラリとくる。

ランカーはそんな彼の背中に手をあて中に促した。その笑顔には「早く入れ」という威圧感が漂う。

何故、私がこんな処にいなくてはならん……青年は半ば苛ついて宴に参加した。運ばれるカクテルグラスを一つ手に取る。

出来れば、思い切りブランデーを流し込みたい気分だ。

「！」

ランカーが手招きしているようだ、しぶしぶ従う。

そこには昼間、謁見した后と、隣には綺麗なドレスを上品にまと

う少女に、凛とした青年。そして髭を蓄えた恰幅（かっぷく）の良い男性。
「こちらが国王のレリアンサイド王。そして今回、君が警護に就くノエル王女に、近衛のアライア」
ランカーの紹介に、青年は丁寧に会釈した。そんな彼に手のひらを上にして王女たちに示す。
「そして、こちらがノエル様のガードに就くベリル・レジデントです」
「よろしく頼みます」
少女がニッコリと可愛い笑顔を見せ、右手をすいと差し出した。
「……」
差し出された青年は、少し眉をひそめてランカーを一瞥する。彼は目で「早くやれ」と指示した。
少し眉をひそめ、その手を左手で受け止めて甲に軽くキスをする。彼の上品な態度と容姿に3人は満足げだが、隣にいるアライアという青年だけはふてくされていた。
そして、彼を挑戦的な目で睨み付けている。
「まあ構わんが」
口の中で発し、その視線をスルーして再びカクテルを手に取る。
料理が並べられているテーブルへ向かい、料理に手を伸ばしたとき音楽が流れた。その音楽に合わせて数人がダンスを踊り出し、宴が本格的に始まる。
「……」
目の前で繰り広げられる光景に、フォークを噛みつつ呆然とした。普段から上品な彼がそうしていると微妙に可愛くも見える。
「！」
そんな青年に女性が1人、目の前に立つ。
手を差し出された。これはまさか……
「お相手、して下さるかしら」
「……」
彼は相手に気付かれないように溜息を吐き出すと、その手を取っ

てダンスホールに足を向けた。
「！　ほう……傭兵のくせに、やるじゃないか」
ランカーは口の端を吊り上げてその様子を眺める。元々、存在感のあるベリルに、そこにいた人間は釘付けになった。
1曲が終わり、彼は再びテーブルへ――
「！」
目の前にノエル王女がいて手を差し出している。
相手は王女だ、断るに断れない。仕方なくノエル王女を連れてまたダンスホールに戻っていった。

そんなこんなで宴も終わり、ベリルは疲れたように服を乱暴に脱ぎ捨てるとベッドに体を投げた。
「……こんなに疲れたのは久しぶりだ」
深い溜息を漏らしてつぶやく。
心身共に疲労が激しい。そのまま意識を無くしかけたとき、部屋のドアがノックされた。

＊馬鹿げた存在

「やあ。まだ起きていてくれたか」
そう言ってランカーが入ってくる。投げ捨てられている服を見て、クスッと笑った。
「その年でも、そういう服を着るのは初めてかい？」
男の言葉に青年は眉をひそめる。
「そんな怖い顔するなって。別に君をどうこうしようって気は無いから」
上半身だけ起き上がった青年の前に立つ。
「今、いくつだい？」
「６２だ」
返ってきた答えに口笛を鳴らした。
「俺の親父と同じくらいか」
そんな男を厳しい眼差しで見上げる。
「俺はなんでも屋だ、君のことを知っていたとしても不思議じゃないだろ」
「傭兵についてもなんでも屋だとは思わなかったよ」
溜息混じりに発して足を組む。ランカーがその隣に腰掛けた。
「国を動かすには、きれい事だけじゃ済まないってことさ」
肩をすくめたあと、青年の横顔を見つめる。
「君の名前が出たとき正直、后には『止めた方が良い』と言いかけたよ」
「何故、言わなかった」
「理由を訊かれたら応えられないからさ」
ベリルは「それもそうか……」と、目を細めた。
「君の事は我々の世界では『公然の秘密』扱いだが、実際会ってみるまで本当に実在しているとは思えなかったよ」
「私だとて自身がそうでなければ信じないだろうね」

不老不死など馬鹿げた存在だ……ベリルは言ってのけた。
「はは……」
自分の事を「馬鹿げた存在」と言い放つ彼にランカーは苦笑いを返す。
そう、ベリルは不老不死である――２５歳の時に不死になり、彼は今もこうしてフリーの傭兵として存在し続けている。
「君のような存在のことを『ミッシング・ジェム』と、云うそうだが……今までにそういう存在には？」
「会ったことはある。何度かね」
「！」
驚く男に彼は笑いながら付け加える。
「生憎、私と同じ人間には会った事は無いがね」
「じゃあ、不死はやはり君だけなのか」
「会った事が無いだけだ。いないとは言いきれない」
考え込む男を一瞥し、口の端を吊り上げた。
「私を試したのか」
「え？　ああ……」
不死など素知らぬふりで応対していた時の事だと気付き、応える。
「一応ね。どういった態度をとるのか気になったんだ」
「むやみやたらに言いふらすと思うかね」
肩をすくめる彼に笑みを返した。
「あそこでそんなことを言えば君は警戒するだろうし、話が長くなるのも面倒だ」
「賢明な判断だ」
そのあと、しばらく沈黙が続いたがランカーは決心したように口を開く。
「実は、問題がまったくないという訳でもないんだ」
「ほう？」
「隣に皇国がある」
発して、膝の上に肘を立て両手を組んで苦い顔をした。

「うむ、過去には争い合った歴史がある」
「うん。それでね、そこの皇子がノエル王女を気に入ってるらしいんだ」
どちらもヨーロッパの中の小国だが、さして気にも留められない規模の諍いは数百年前から繰り返されていた。
双方の国には稀少な資源も経済効果もなく、観光好きの人間がレア感覚で来るような国で『細々と存続している国』という認識をされても不思議ではないほどの小国だ。
「で、その皇国の皇子は割と乱暴者でさ。強硬手段を取らないとも限らないんだ」
「レオン皇子といったか」
「そう」
頷いて青年にすっと写真を手渡す。
「年齢は19歳」
聞きながら渡された写真を見つめる。
肩までの黒髪に漆黒の瞳は切れ長で、なかなかの男前だ。しかし、ベリルはその笑顔に眉をひそめる。
好戦的な一面が、その顔から見て取れたからだ。
「事あるごとにノエル様にアプローチしてくる。むやみに拒否することも国交上、出来ないし」
「ノエル王女は17歳になるのだったな。婚約者は？」
それに、ランカーは言葉を詰まらせた。
「婚約者はいない……だが」
「付き合っている相手は存在するのだな」
「その部分には触れないでくれ、王も王妃も知らないんだ」
「解った」
「出発は3日後だ。それまでゆっくりしてくれ」
言って、部屋から出て行った。
「そう言われてもな」
この状況で、どうゆっくりすれば良いのか……困ったように扉を

見つめる。
「とりあえず寝るか」
小さく溜息を漏らしベッドに潜り込んだ。
「……」
静かすぎて返って眠れない。傭兵であるベリルは戦場でも眠れる自信があったが、何の音も無い場所ではむしろ眠れない事を知った。
虫の音でもあればまだマシなのだが……それでも精神的に疲れていたのか、いつの間にか意識は遠ざかっていた。

＊目覚めからじんわり騒動の予感

朝――

「ふむ……」

目覚めたベリルは伸びをして、しばらく考える。しかし、何をすればいいのか思いつかない。

とりあえず着替えて庭に出る。色とりどりに咲き乱れた花が、心地よい香りを放って青年を迎えた。

咲きほころぶ花に、その口元をゆるめて見つめる。

「ハッ！？」

視線に気付いてその先に視線を送ると女性の庭師が2人、ジッとこちらを見ていた。

「おはよう」

「おはようございます」

丁寧に挨拶を返されたが妙に居づらくなってその場を離れかけたそのとき……

「ベリル様」

「！」

1人の庭師が、彼にいち輪のバラを手渡した。

「どうぞ」

にこりと微笑まれる。

「……すまない」

真っ赤なバラをどうしろというのだ……当惑しながらそれを受け取り、庭から足早に去る。

＊アイドル

「見た？」
「見た見た。凄く上品な人よね」
彼が去ったあと、女の庭師たちは花の手入れをしながら話し合った。
「傭兵って話だったけど。本当？」
「見えないわよね～」
「そんなこともないだろ」
女たちの会話に、１人の男が割って入る。
「何がよ。ケイオス」
「お前たち、腕を見なかったのか」
「腕？」
ケイオスと呼ばれた庭師は、自分の腕を見せて説明する。
「筋肉。あれは鍛えられたものだ」
「……」
男の言葉に２人は考え込んだ。顔ばかり見ていたため、体つきまでは気に留めていなかった。
「そういえば、服装もラフだったわね」
ジーンズに黒い長袖インナーに白い前開きの半袖シャツを合わせた格好をしていた。
「背中の腰あたりに銃を携帯していたのがチラッと見えたよ。それを隠すためにああいう着方をしてると思う」
「あんた、よく見てるわね」
女たちは感心した。
「傭兵って聞いてたから、自然とそっちに目が行くよ」
女性と男性では、気に留める場所が違うようだ。
「でもさ、あれなら全然いいわよね」
「うんうん」

「ていうか、そこらの俳優より格好いい」
女たちは、久しぶりの華やかな話題にキャアキャアと黄色い声を上げながら仕事を続けた。

「暇だ」
つぶやいて、王宮の通路を歩く。
「!?　えっ?」
持っていたバラを通りすがりの侍女に渡し、そのまま外に出た。
「!」
どうやら出た先は馬場らしい、みごとな馬たちが柵の中を優雅に駆けている。する事も無い青年は、そんな馬たちを柵に肘をついて眺めていた。
「!　ベリル様、いかがなされました?」
「暇なだけだ」
どうしてこんな人間までが自分の名前を知っているのかと多少の疑問を残しつつ、馬の世話をしている男に話しかけられて無表情に応えた。
「乗られますか?」
「ふむ……」
示された馬たちを一瞥し、しばらく思案する。

「ハァッ!」
勢いよく馬の腹を蹴り、その脚を速め頬に受ける風を感じて目を細めた。
「どうどう」
ひとしきり風を楽しみ馬を止め、なだめるようにその首をさする。
「素晴らしい乗りこなしですね」
「馬がいいんだよ」
発して馬から下り、微笑んで馬の顔を見上げた。
「よく世話されている」

「ありがとうございます」

夕刻――

「君、何をやってるんだ」

食堂で酒を傾けているベリルにランカーは眉をひそめた。

「仕方なかろう。暇なのだ」

「そうじゃない」

言って、青年の隣に座る。

「王宮じゅう君の話で持ちきりだ」

「……？」

理解していない彼に深い溜息を漏らす。

「君、庭園で何かしたな」

「花を見ていただけだ」

「で、いち輪もらったその花はどうした」

「通りすがりの女性に渡した」

「馬場では何を？」

「馬に乗ったが」

「……」

「？」

ランカーはワインを飲むベリルを眺めて「君、アイドル並に騒がれているよ」と言い放った。

ブハッ！？　青年はワインを吹き出した。

「……は？」

目を丸くしてランカーを見やる。

「やっぱり自覚無かったな」

「どういう意味だ」

眉をひそめながら気を取り直すように、ワインボトルからワインをグラスに注ぐ。

「君、自分が目立つ容姿だと自覚してないだろう」

「目立つかどうかは知らんが……」

再びワインを傾ける。
そんな彼に、「君のファンクラブが出来そうだ」と付け加えた。
ブハッ！？　再び吹き出す。
「ゲホッゴホ……？」
咳き込みつつ男を見やり、ぐいと口を乱暴に拭う。
「なんだそれは」
「もうちょっと注意しろよ。君のことはただの傭兵としかみんな知らないんだぞ」
「注意しろと言われてもだな」
「俺が言わない限り大丈夫だとは思っているが」
ワインボトルに目をやる。
「飲むかね」
「そのワイン。かなり高級なやつだ」
そんな青年に男は溜息混じりに発した。
「美味いぞ」
グラスを小さく掲げた彼に、男は再び短く溜息を吐く。
「まかないは君のことが気に入ったらしい。滅多に出さない年代物だ」
「……」
言われて、ワインをマジマジと眺めた。
「小国だからな。賓客も珍しいうえに傭兵でその言動はかなり目立つ」
まあ気をつけろ……ポンと青年の肩を叩き、食堂から出て行った。
去っていくその口元がニヤリと笑んでいたのを彼は見逃さない。
ドン！
「サービスだ」
「……」
当惑するベリルの前に、鶏の丸焼きが鎮座した。
「！」
そこにアライアが入ってくる。青年もベリルに気付いて睨みを利

かせた。
やれやれ、私は彼に嫌われているらしい……肩をすくめて溜息を吐き出しワインを口に含む。
「随分、人気があるじゃないか」
近づき、嫌味を込めて言い放つ。
赤茶色短髪と焦げ茶色の瞳にその顔立ちは、まだ成人になりきれていない幼さを残していた。
「それほどでもない」
挑戦的に見つめる目を一瞥し、しれっと応えた。
「……っ」
一瞬、体を強ばらせギロリと睨みを利かせる。
見た目は青年とはいえ年期が違う、その存在感に言葉を詰まらせた。
「はて、何かしたかな」
フンッ……と鼻を鳴らして食堂から出て行くアライアの背中を見つめ、さして気にもしていない声色でつぶやいた。

＊旋風

次の日――
「おはようございます」
「おはよう」
1人侍女が満面の笑顔で部屋に入ると嬉しそうに掃除を始めた。
この顔には見覚えがある……昨日、邪魔な赤いバラを渡した通りすがりの侍女だ。
「……」
どうしたものかと掃除風景をしばらく眺め、散歩でもするかと歩き出そうとした。
「あのっ」
「なんだね」
呼び止められて振り向く。
「あの、昨日。お花、ありがとうございます」
はにかみながら応えた。
「ああ、そんな事か」
今更、邪魔だったから押しつけたとも言えない。
「少し出る」
「お気を付けて」
気遣いの言葉を背に受けて部屋をあとにした。
「……参ったな」
壁に手を突いてうなだれる。
この展開はまずいような気がする。誤解され続けるのはどうか……いっそ、侍女全員に花を配れば誤解も無くなるかもしれない。
「軽薄な男」と思われた方が、いくらか楽だ。
「は～」
深い溜息を吐き出した。無表情ながらもその心中は割と当惑しているらしい。

「ベリル」
呼ばれて振り返ると、ランカーが軽く手を挙げて挨拶した。
「出発の準備を手伝ってくれないか」
「構わんよ」
そうして、並んで歩く青年の横顔を一瞥してクスッと笑う。
「誘って正解だったかい？」
「暇でかなわん」
げんなりした様子に再び笑みをこぼす。
「君を野放しにしてたら、さらに騒動が起きそうで怖いしね」
「言ってくれる」
王宮の離れにある、小さめの建物に入る。ガードの宿舎にもなっているようだ。
「！」
中央のテーブルに乗せられている機器に目を留め、青年は表情を明るくした。
「嬉しそうだな」
「久しぶりに見た感覚だ」
ベリルはそこにいるガードたちと握手を交わすと、さっそく機器の説明を聞く。
「さすが傭兵か」
先ほどとはまるで違い、活き活きと見える青年に小さく溜息を漏らした。そんな男の肩を誰かがチョイチョイと指で叩く。
「ん？」
さらに袖を軽く引っ張られて振り向いた。
「どうした？　こんな処に」
「あのね」
どことなくランカーに似ているその女性は彼の妹、レイナである。王宮の侍女をしていた。真っ直ぐに伸びた彼の髪とは違い、緩やかなウェーブを描いている。
彼女が、すいと何かを差し出した。

「？　……」
その写真に眉をひそめる。
「もうここまでキテるのか」
「そうみたい」
「ベリル」
「！　なんだ」
歩み寄った青年に写真を手渡した。
「……」
その写真に眉をひそめる。
「なんだこれは」
「君の写真だ」
それは、先日の宴の時のものだった。
「結構、出回っているらしい」
「ほう」
「1枚5ドルよ」
女性が右手を広げて応えると、さらに深いしわを刻む。
「他にも何種類か見かけたわ」
「処でお前は誰だ」
「俺の妹だ。侍女をしている」
ベリルはそれに、ああ……と声を上げ再び写真に目を移した。
「で、どんなものがあるのだね？」
聞き返すと彼女は少しためらいがちに目を伏せる。
「あるなら出せ」
「返してくれる？」
兄に言われてエプロンのポケットから1枚、取り出して見せた。
「……」
2人は、その写真に顔を見合わせた。
「いつ……」
「それは俺も知りたい」
どうやら風呂上がりの画像らしい、上半身裸の姿が映し出されて

いる。
「っていうかお前、返してほしいってな」
「いいじゃない。格好いいんだから」
しれっと応えた妹に頭を抱え、ベリルを一瞥した。
「君は出発の日まで部屋から出るな」
「そうさせてもらう」
ある意味、娯楽の一つとして騒がれている部分もある事をランカーもベリルも理解している。しかし、これ以上は付き合っていられない。この騒ぎを無理矢理終わらせる事にした。

そうして出発当日――空港は国を挙げての盛大な見送りだ。
「……」
平和な国なのだな。ベリルは小さく笑ってサングラスをかけた。いくら小国とは言っても、テレビカメラが一つも無い訳じゃない。
王族専用ジェットに乗り込み、ノエル王女の2つ後ろのシートに腰掛ける。
「ベリル、隣に座って。お話がしたいわ」
「解りました」
素直に従い、アライアの横を通り過ぎるときに軽く睨まれた。
「傭兵ってどんなコトをするの？」
隣に腰掛けると、さっそく少女は嬉しそうに問いかける。
「大した事はしない。要請を受けて戦うだけです」
「でも、命がかかっているのでしょう？」
「そうだな、レベルはピンキリだ」
傭兵に興味のある少女は日本に着くまで彼を質問攻めにした。

＊衝撃は突然に

「あ～、久しぶりにのんびり～」
その青年、ダグラス・リンデンローブ・セシエルは黄色のソファに体を預けてのんびりとテレビを眺めていた。
背中まである見事なシルヴァブロンドの髪は直毛で、邪魔にならないように後ろで束ねている。赤茶色の瞳は大きく、可愛い顔立ちの彼は傭兵だ。
ここは日本の首都圏――傭兵仲間である友人宅に泊まりに来ている。
「ダグ～生魚は平気か？」
キッチンから友人が尋ねた。
「ん～、どっちかというと好きなほう～」
「オッケー」
液晶テレビのリモコンを持ち、ジュース片手にあちこちチャンネルを変えてローカルテレビにチャンネルを合わせた。彼は日本語を理解出来るのだ。
＜ルシエッティ王国からノエル王女が大使として来日されました＞
「ふーん。聞いたコト無い国だなぁ」
刹那――ブホッ！？
青年は目に映った映像にジュースを吹き出した。

＊奇遇

「今の……ベリル？」
黒いサングラスしてたけど確かにベリルだよな、何やってんだ。
あっという間に終わったニュースに眉をひそめる。
「リアルタイムニュースだったよな。ってコトは日本に来てるのか」
青年は小さく唸り、思案するような表情を浮かべた。
「おーいアキト」
「んー？」
キッチンにいる友人に呼びかける。
「お前、ベリルに会いたいか？」
「何！？」
世良（せら）アキトがすぐさま包丁を持って駆けてきた。
「あぶねーなぁ……」
「いやごめん。それより今なんてっ？」
乗り出すように聞き返す彼に、ダグラスはしれっと応える。
「だから、ベリルに会いたいか？　って」
「会いたいに決まってんだろ！　そのために初めはお前に近づいたんだからな」
正直な奴……目を輝かせて見つめる友人に半ば呆れた。
現在２７歳のダグラスは１５歳から２０歳までの５年間をベリルと共に過ごしていた、いわゆる弟子というものだ。
彼とベリルとの出会いはある意味、衝撃的である。
青年の父親はダグラスが自分の子どもではないと気づき、死ぬ事のないベリルに妬みを抱いていた事もあって彼の名の失墜と、ダグラスの命を奪う事を同時に計画した。
ダグラスを殺す事となったのは、妻への愛情の深さ故でもある――ダグラスの父ハミル・リンデンローブも、かつては有名な傭兵だった。

妻は強い男が好きで、家を訪れる傭兵たちを誘惑しては抱かれていた。妻への愛から、それを見て見ぬふりをしていたハミルだったが、ダグラスはそんな男たちの1人の子だと知り憎悪へと変貌する。

ベリルを相手にしたのがそもそもの間違いで、彼の計画は全て失敗に終わった。しかし、妻を殺してその道連れとした。

天涯孤独となったダグラスを引き取り育てたという訳だ。

しかし、その後がまた奇縁（きえん）ともいうべき事実がある……ダグラスの実の父は、クリア・セシエルという名のハンターである。

ベリルとセシエルは、深い絆で結ばれた盟友だった。たった2度の出会いが2人を強い絆で結びつけたのだ。

セシエルは55歳で死亡し、自分に子どもがいる事すら知らずに逝ってしまっただろう。

そんなこんなでダグラスがベリルの弟子であった事は、傭兵たちの間では割と有名な話である。そのおかげかどうかダグラスは一目置かれる存在だ。

ベリルはその戦闘センスから、『素晴らしき傭兵』と呼ばれ、若き傭兵たちなどから憧れの対象となっている。

世良アキトもその1人だ。自衛隊に所属していたがベリルの噂を耳にし、傭兵の世界に足を踏み入れた。

元々、傭兵という仕事には興味があった訳で、ベリルという人物をきっかけにしたに過ぎない。自衛隊にいた頃には、ベリルという人間が不死だという事は知らなかった。

『凄い傭兵が海外にいる』

そんな噂が流れていただけなのだ。

幼い頃に両親を亡くし心配してくれる親戚もいないアキトにとって、傭兵になる事に周りからの抵抗はなんら無かった。

彼の外見は日本人特有の小柄ではなく、大柄だ。ダグラスはというとアキトに比べると、やや小柄で細身である。

父であるクリア・セシエルの血を引いているせいか、魅力的な大きめの瞳と優しい顔立ちをしている。

「それで、会えるのか！？」
「ん～」
急かすように聞いてくるアキトを横目に携帯を取り出した。
「日本にいるらしいんだよね」
「マジか！？」
「電話してみる」
「てめっ！　番号知ってんなら教えろよ！」
「バカか。簡単に教えられる訳ねーだろ」
「それもそうだけどよ……」
悔しげな顔の友人に言い放ち、相手が出るのを待つ。
「あ、ベリル？」
＜……＞
「……」
しばらくの沈黙――
ベリルは、何故いま彼が電話をかけてきたのかを考えているのだろう。偶然とは思えない。
「友達が会いたいってさ」
＜ほう＞
「てな訳だから、これから行くね」
相手の返事も待たずに電話を切った。
「んじゃ行こうか～」
「ちょっちょっと待ってくれ！」
伸びをしながら立ち上がると、アキトは慌ててキッチンに向かった。

＊奇遇（後書き）

＊セシエルとの出会いについては
＜素晴らしき傭兵＞シリーズ
「天使という名のハンター」で
ダグラスとの出会いについては同シリーズの
「天使の残像」の中の「絆の継承」
にて描いておりますので是非、覗いてみてください。

＊あなたってそんな人

某帝国ホテル――玄関前。
「ふえ～、初めて来たぜ」
アキトはホテルを見上げた。
入り口にいる王女の警護らしきスーツを着た男に、ダグラスが話しかける。しかし、男は首と手を振って取り合ってくれそうもない。
「もう」
ダグラスは仕方なく電話をかけ始めた。
「あ、ベリル？　いまホテルの前に……」
“プツ……”
「あ」
「切られたのか？　まさか怒ってるんじゃ」
「違うよ。しばらく待ってよう」
「……？」
いぶかしげに思いながらも、言われた通り黙って待つ事にした。
「処でさ」
「なに？」
ダグラスは友人が持っている荷物に眉間にしわを寄せた。
「なに持って来てるんだよ」
「だって折角、作ったんだぜ。新鮮な方が美味いんだ」
「そりゃそうだけど……あ」
玄関の自動ドアから、栗毛で後ろ髪が少し長くゴムで簡単に束ねている長身の若い男が出てきた。
「ダグラス様とご友人の方ですね。こちらへ」
2人を中へ促す。
「ね？」
「……」
すぐに話をつけるから、わざわざ言わなくともいいから切ったっ

て訳か。それをすぐに察する辺り、さすが弟子だっただけはある…
…アキトは唖然とした。
エレベータに入り、最上階（ペントハウス）のボタンを押す。
しばらくの沈黙のあと、男が口を開く。
「申し遅れました。私はランカーと申します。処でその荷物は」
「ああ、気にしないで。彼が作った料理だから」
「なるほど」
「毒なんて入ってないぜ」
警戒されている事に気付き、慌てて発した。
「大丈夫だよ、ベリルが先に食べるから」
「え？」
「……？」
怪訝な表情を浮かべる2人に説明する。
「いつもそうなんだ。先に食べて毒味するの」
「へえ……いやでも、死なないんだから毒味しても仕方ないんじゃ？」
「違う違う。死なないだけで、症状は出るの。だから、どんな毒が入れられてるかとか解るんだ」
「へ、へえ～」
彼ならではの方法だな……と2人は感心した。
「もっとも、それが睡眠薬とかだと眠っちゃうからヤバイけどね～」
あっけにとられている2人をよそに、ケタケタと笑う。
そうして静かに止まったエレベータのドアが開き、エントランスが広がる。最上階にはこの部屋しかないため、通路は必要ないのだ。
目の前に置かれているソファセットにベリルが腰掛けていた。
「やあ、久しぶり～」
「……」
ダグラスが軽く手を挙げて挨拶すると、彼は無言でそちらに顔を向けているだけだ。
「どこに映っていた」

ぶっきらぼうに尋ねる。
「ローカルテレビ。３０秒もなかったんじゃないかな～。いや偶然チャンネル合わせたらびっくりだよ」
その答えに、彼は足を組んで片肘をつき眉間にしわを寄せた。
「わ～……ホンモノだよ」
「！」
ぼそりとつぶやいた青年に気付き視線を移す。
「ああ、紹介するよ。俺の友達、世良アキト」
「ダグが世話になっている」
「こっこちらこそ！」
焦って声がうわずった。立ち上がり、差し出された右手に慌てて自分も右手を出す。
「！」
あれ……？
「想像よりも小さいって思ったろ」
友人の表情にすかさず応えた。
「！？　い、いや別にっ」
図星らしい、かなり動揺している。
「大半の者は私を大柄だと思う」
ベリルは小さく溜息を漏らした。
「仕方ないよね。画像だと身長とかわかんないもん」
「そっそれはその……」
ベリルは１７４ｃｍ、ダグラスは１７８ｃｍ。日本人であるアキトは１８０ｃｍと、この中では一番高い。
「処でその荷物は」
アキトの持っている荷物を見やる。
「あっ。これ俺が作った料理です」
テーブルに乗せて料理を見せた。
「ほう……刺身か」
綺麗に並べられた魚介類に声を上げた。

「あ、刺身とか大丈夫ですか？」
「私は好きな方だが、王女たちには難しいな」
「生魚を食べる習慣は無さそうだね」
「！　そうだったか」
「少しもらっていいかね？」
言いながら別の皿を用意した。
「え？」
「別の料理にアレンジするの？」
「うむ」
「料理出来るんすか？」
「多少はね。厨房を借りてくる」
刺身を一通り取ってキッチンに向かった。こういう部屋にはキッチンが設置されている。
「ベリルさんて料理とかも出来るんだな」
「っていうか。美味いよ」
ソファに腰掛けながら応えた。
「そうなのか？」
「俺が日本料理好きになったのも、ベリルの料理のせいだもん」
出された紅茶に口を運ぶ。
「ベリルはアレだから何食べても太らないけど。俺はちゃんとトレーニングしないとまずいだろ。だから、料理して食べさせてくれてたの。元々、料理とか好きだし」
「へえぇ～」
「こちらがベリルのお友達？」
突然、女性の声が聞こえて2人は振り向いた。
「初めまして。ノエルと申します」
そこにいたのは、魅力的な瞳をした少女――ノエル王女は、小さく腰を下げて挨拶した。
「こ、こんにちは世良アキトです」
「ダグラスです」

綺麗な栗毛と青い瞳を見てアキトは、なんだかお伽の国にでも足を踏み入れた感覚になった。
「お二人とも、とても魅力的ね」
少女は楽しそうに両手を合わせ微笑んだ。
「そ、そんなこと……」
「有り難いお言葉です」
「でも、ベリルが一番ね」
少女の言葉に、2人は王女の後方にいる青年に目を向けた。
何故なら凄い目で睨まれたからだ。しかも、王女はその青年を一瞥して発したのを2人は確認している。
「……」
この2人はもしかして……事情を知らない2人でもピンときた。
「あ、あのですね」
ランカーは慌てて2人を部屋の隅に呼びつけて説明した。
「なるほど～、まだ秘密の関係なんだ」
「へえ。ランカーさんも大変だね」
「お二人は察しが良い」
それにダグラスはニヤリとした。
「ベリルは全然気付いてないでしょ」
「彼はいつもああなんですか？」
「そうだよ。恋愛に関してはまったく」
「え？　ベリルさん2人に気付いてないの？」
3人は互いに顔を見合わせる。
「まったく？　全然？」
「うん。もうからっきし」
「うそ……」
目を丸くしている2人に肩をすくめる。
「完璧な人間なんていないってコトさ」
「いやしかしさ……モテない訳でもないだろうに」
「ま、ああいう人だから」

薄く笑って言い放ったダグラスに呆然とした。

＊舌鼓（したつづみ）

「これは何ですの？」
少女はテーブルの上にある大きな皿に興味を持った。
「あ、刺身です」
「サシミ？」
首をかしげる少女に、ダグラスは丁寧に説明を始める。
「日本料理ですよ。生の魚を食べる習慣が日本にはあるんです」
「まあ」
金持ち特有の、おっとりした驚きの声を上げた。そこへ、ベリルがワゴンを押して戻ってくる。
「！　ノエル。疲れていないかね？」
「はい、大丈夫です」
「……」
王女に向かってその口の利き方は……ベリルらしい、といえばベリルらしいけど、とダグラスとアキトはその光景を呆けた顔で見つめた。
アキトはひょい、とベリルの運んできた料理に目を移す。
「お吸い物だ」
「こっちはあんかけかな」と、ダグラス。
「刺身に合うのはやはり日本料理だろう」
ベリルは発して料理をテーブルに乗せていく。
「さて、食べようか」
ダグラス、アキト、ランカーそれにノエル王女を席にうながした。
「いただきます」
「い、いただきます」
ランカーとノエルはフォークとナイフを、残りは箸を持ち料理に手を伸ばす。
「……」

王女は、恐る恐る刺身を口に運んだ。
「！　美味しい！」
「よかった」
アキトがほっとして、お吸い物に口を付ける。
「うっ！？　美味い」
それにベリルがニコリと微笑んだ。
「このあんかけは？」
「魚をすり身にして周りに細かく砕いたはるさめをまぶして揚げたものだ」
問いかけたダグラスに応える。
「凝ってるなぁ～」
アキトはほおばりながら感心した。
「日本食って、薄味ですけど食べていくと、とても美味しいのですね」
可愛く微笑む少女にベリルも笑みを返す。
「日本人は旨味を感じ取る感覚が優れているのでね。こういう調理法が発達した」
「アメリカ人には旨味を感じる部分が無いって本当か？」
「無い分けじゃないよ。使うコトが無いから眠ってるみたいなもんなの」
アキトの言葉にダグラスが眉をひそめて続ける。
「日本にくると、それが呼び覚まされるらしい」

楽しい食事も終わり、一同はリビングでくつろぐ――
「美味しかったですわ」
アキトに笑顔を向けたあと、少女はベリルに視線を移した。
「あの、ベリル……頼みがあるのですが」
「なんだね？」
「日本を見て回りたいのです」
「観光したいってコト？」

ダグラスが問いかけると、少女はコクンと頷いた。
「……」
まあ別段、危険な事も無いか……ベリルたちは互いに顔を見合わせる。
「では、これから少し段取りを組みます。しばらくお待ち下さい」
「ありがとう。ランカー」
ノエルは笑うと、奥の部屋に入っていった。それを確認したダグラスは、ランカーに目を向ける。
「観光っていうと、この近くならどこがいいかな」
「そりゃあ、有名所っていえば浅草とかじゃないか？」と、アキト。
「今日は1ヶ所回れればよしとするか」
いつの間にか、ダグラスとアキトはベリルの仕事に加わっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1515z/

お姫様のガーディアン

2011年12月20日17時50分発行